事業企画部

部長　後藤 章

1年間の主な活動を報告します。

２０２０年3月よりのコロナウイルス感染症は治まることがなく、協会運営は昨年度と同じような大幅な事業計画の縮小を余儀なくされました。その中でも工夫を凝らして下記の事業を新たに起こし、また継続事業も行いました。

また、協会の一般社団法人化への検討、研究を事務局と行い２０２２年3月の総会にて法人化へ向けての事務作業移行に賛意を得られ、２０２２年8月ごろまでに組織素案を提案し決議をもらう予定。

新規事業

１．　月刊『現代俳句』及び協会出版物の電子書籍化事業を起こしました。２０２２年5月現在でＨＰ上に『現代俳句』を電子書籍化して販売している。（会員への閲覧確認コード配給は6月予定）

２．全国の地区協会で使用可能な初心者講座向けパンフレット（講義用）の製作に着手。5月中には完成する。これにより各地区協会で初心者講座を開きやすくできる。

継続事業

１．地区協会長インタビューシリーズ
埼玉、東北海道、関西、甲信、神奈川、東京、宮城、東海、中北海道の９地区がオンエアーしました。現在福岡が準備中です。

２．協会出版物のネット販売
会員の句集をはじめこれまで協会が制作した出版物も『妻恋坂書房』で販売を継続している。現在までの会員との販売契約数は 13 件（内２人が２冊同時契約)。

３．地区の広報誌の俳句作品を会長が選句して講評するページ
好評につき引き続き実施。

４．GHOC 関係
GHOC への外部からの講師派遣依頼を１４件受けた。うち 2 件は厳正な抽選を行い講師を決定した。その他は当該地区協会に人選を任せた。（先方から講師の条件指定案件が増加の為）

５．俳句ポスト関係
コロナ化にも関わらす今年も全国の図書館６１館から毎月６００句前後の投句をいただいた。今後も続けてゆく予定である。直近では７０館に増えている。

事業部

部長　大石雄鬼

事業部の活動は、伝統ある現代俳句講座と全句講評講座が中心であるが、東京オリンピックがあった令和３年は、第１回全国スポーツ俳句コンクールを共催という形で実施した。

現代俳句講座は、オンラインを使用したものと会場を使用した２回を実施。オンラインでは宮坂静生講師による「『おくのほそ道』の読み方」をタイトルとした講演。内容は「おくのほそ道」の２つの謎、①紀行文は自己告白ではなかったか。②芭蕉はなぜ弟子たちが見たいとの願いを拒否したのか。この２点について、長年、考えてきた私見を述べる、というもの。こしのゆみこ氏と浦川聡子氏にも後半出演してもらい、質疑応答の時間とした。

現代俳句講座の２回目は筑紫磐井講師による「季語は生きている」をタイトルとした講演。内容は、季題・季語の発生と、季語をめぐる現代俳句における基本的考え方を紹介し、この基本的な考え方に応じた俳句の詠み方、さらには季重なりの考え方、忌日俳句の考え方など実用面も紹介するというもの。ゆいの森あらかわ「ゆいの森ホール」（東京都荒川区）で実施した。従来であれば２人の講師により開催するが、新型コロナウィルスの影響で開催時間に制限があり、筑紫講師のみの講座とした。なお、若手俳人赤野四羽氏、赤羽根めぐみ氏による季語を中心にした鼎談も実施して、盛り上げた。

全句講評講座もオンラインと会場との２回行った。オンラインは全国どこからでも参加できるもの。対馬康子副会長を講師として開催。２８名が参加した。会場版は、茨城県現代俳句協会が希望した秋尾敏講師により実施。３６名が参加した。

本年初めて実施したのが、全国スポーツ俳句コンクール。日本スポーツ芸術協会（主催）と現代俳句協会（協賛）が、「国民体育大会」並びに「全国障がい者スポーツ大会」の文化プログラムの一つとして実施した。国体、オリンピックを始めとした各種スポーツや日ごろ行っている運動をテーマとした俳句を広く募集した結果、東京オリンピックの開催期間だったこともあり、多くの応募があった。募集期間は、２０２１年７月１日（木）～８月１５日（日）。応募数は、一般の部で３３２４作品（応募者数８５２名）、高校生以下の部で６８９作品（応募者数１９２名）。予選を現代俳句協会会員で行い、本選は現代俳句協会の会長及び幹事、国体開催予定県だった三重県の地区協と、日本スポーツ芸術協会理事で行った。それぞれの部で金賞、銀賞、銅賞、入賞を授与した。今後、国体開催に合わせ実施していく予定である。

◇『現代俳句年鑑　２０２２』の発行

参加者１７８３名、８９１５句を掲載できた。参加者の皆様には心より御礼申し上げる。山本敏倖部長の新体制により発足。年々減り続ける会員数により、自動的に減少する年鑑参加者に何とか歯止めをかけるべく各方面に依頼。事務局の応援を頂きながら締め切りを延長し、督促を出しての結果である。

出版部

部長　津髙里永子

去年度よりは新型コロナウィルス感染拡大を防ぐ自粛生活が緩やかにはなってきたので、月一度の出版部の打ち合わせも現代俳句協会の図書室が空いている限り、実施された。出版希望の方はコロナ禍でも目立って減ることもなかったのだが発行日を急がない著者が多かったので、実際に出来上がった句集は例年より減っている。しかし、出版部の忙しさはあまり変わらなかった。

今年度も第二回目として、兜太新人賞受賞者への副賞として、小田島渚氏の句集を編集中である。印刷会社とデザイナーのご協力のもとに、なるべく受賞者の負担にならないように、その上で、ご意向やご希望を損なわないようにと鋭意努力している。句集は価格を考えなければいくらでも凝ることができるが、シンプルにかつセンスよく、一つの記念碑として助成する協会の意図をも加味されるよう、協会の品格も問われることになる句集と受けとめている。

他の依頼者方にも、なるべく低価格で出版することが私たち出版部の任務ではあるが、昨今、ご要望がかなり多様化してきて、時間的物理的にボランティアの域をかなり超えてきているのが現実で、ひいては、このことが部員の減少にもつながっている。とはいえ、出来上がったときの達成感は格別である。

二〇二十一年七月から二〇二二年六月までに発行された句集は、大河原真青句集『無音の火』、山田哲夫句集『茲今帖』、林桂句集『百花控帖』、岡田耕治句集『使命』、久下晴美句集『単眼鏡』の五冊、進行中の句集が川名つぎお句集『焉』、瀬間陽子句集『新潮文庫の栞紐』、本田巌句集『匹夫なれども』、鈴木正治句集『雪間』、高橋比呂子句集『風果』、そして原田要三句集『青蘆』の六冊。

最後に出版部員をご紹介。青島哲夫、足立喜美子、新井温子、上田桜、劔物劔二、塩谷人秀、津髙里永子、山地春眠子、そして新しく、四月より仲綾子（俳号、加那屋こあ）さんが加入してくれた。それゆえ、ベテランの山地氏に今一度、漢字の正字・略字・旧字などについて講義を受け、より以上の校正の正確さをはかった。忙しさにもめげず、句集作りが大好きな仲間たちである。

なお、昨年九月に、出版部員としても頼りがいのあった岡田一夫氏が亡くなられてしまった。療養中とは存じていたが、寂しさもひとしおである。生前に、句集を作りたいようなお話をされていたこともあって、奥様が一夫氏の句稿をなんとかまとめようとされている。私たちもできるだけのお手伝いをさせていただきたいと思っている。

最後になったが、機関誌「現代俳句」に二回にわたって、出版部の成り立ちや、これまでの歴史などを紹介したことも報告しておきたい。歴代の部長や部員を務められた方々のご苦労があっての今の出版部があることがあらためて、きちんとした資料のもとにわかることができて「現代俳句」に感謝している。要領の得ない書き方で読みづらい文章になっているので申し訳なく思うが、これまでの出版部にご興味のある方は、どうか、「現代俳句」二〇二二年二月号三月号の「出版部の軌跡」を読まれんことを望む。

出版をご希望の方はもちろんのこと、出版部にご興味のある方が事務局あてにご一報を！

顕彰部

部長　宮崎斗士

〇第７６回現代俳句協会賞

令和３年６月２６日（土）選考委員会を開催。第一次投票の結果、最終候補に石倉夏生『百昼百夜』、神野紗希『すみれそよぐ』、なつはづき『ぴったりの箱』、秦夕美『さよならさんかく』の４編が残った。論評、討議を経ての最終投票では、石倉夏生５点、なつはづき５点、神野紗希４点、秦夕美４点の結果を得た。この結果に基づいたさらなる討議の末、今回は各選考委員の意見がはっきりと分散､「この一冊」と絞るのが極めて困難ということで、全員一致で受賞者なしの結論に至った。

〇第４１回現代俳句評論賞

令和３年７月３日（土）選考委員会を開催。応募総数１３編。討議の末、越智洋、高橋透水、袴田一博の作品が最終候補に残った。この３編を対象にさらに討議を重ねたが、最終的には委員の多数が「今回は自信を持って推せる１編がない」との意向を示した。よって受賞作なし、委員の高評価を最も多く集めた越智洋の「透明な俳句空間―芝不器男論」を佳作とすることで全員の意見が一致した。

〇第２２回現代俳句協会年度作品賞

受賞　中村遥「その色」・星野早苗「櫟の実」

令和３年７月１７日（土）選考委員会を開催。応募総数２３２編。各選考委員が特に推す作品を中心に論評。活発な討議が行われた。討議終了後、候補作が小津由実「不思議な話」、中村遥「その色」、星野早苗「櫟の実」、松下カロ「実朝」、松王かをり「むらぎもの」の５編に絞られ、この５編について順位を付した上で投票（第１位５点～第５位１点と換算)。中村遥２０点、星野早苗２０点、松下カロ１９点、小津由実１６点、松王かをり１５点の結果を得た。最高点を獲得した中村遥「その色」、星野早苗「櫟の実」の２作受賞を委員全員一致で決定した。

〇第３９回兜太現代俳句新人賞

受賞　小田島渚「真円の虹」

令和３年８月２１日（土）選考委員会を開催。応募総数５３編。第一次・第２次予選を通過した１４編につき､各選考委員が特に推す作品を中心に論評｡委員全員の合意のもと９編を最終候補作として残した｡１編ずつにつき、委員全員で長時間に渡り討議｡終了後、各委員が９編の中から５編を順位を付した上で投票した（第１位５点～第５位１点として換算)。その結果、小田島渚２５点、福林弘子２３点、織田亮太朗１３点、土井探花１６点、斎藤秀雄１４点、松井真吾１１点、楠本奇蹄８点、林かど４点、杉野祐子１点となった。

これを踏まえ､さらに論議､検討した結果､最高点を獲得した小田島渚「真円の虹」の兜太現代俳句新人賞受賞、および高得点を得た福林弘子「系譜」織田亮太朗「肉声」の２編を佳作とする旨を委員全員一致で決定した。

〇第 22 回現代俳句大賞

受賞　川名大

令和４年２月１６日（水）選考委員会を開催。中村和弘会長を委員長とした選考委員１０名が、候補者１１名の現代俳句における業績について討議を重ねた。

各委員の意見を集約した結果、全員一致にて川名大の受賞が決定した。

年鑑部

部長　山本敏倖

◇『現代俳句年鑑　2022』の発行

参加者１７８３名、８９１５句を掲載できた。参加者の皆様には心より御礼申し上げる。山本敏倖部長の新体制により発足。年々減り続ける会員数により、自動的に減少する年鑑参加者に何とか歯止めをかけるべく各方面に依頼。事務局の応援を頂きながら締め切りを延長し、督促を出しての結果である。

相変わらずコロナ禍は続いているが、部員全員の固い結束により、月３回の校正に揺るぎはない。俗字は使用しないという基本姿勢を厳守しつつ、誤字脱字、旧かな新かな使い修正に始まる原稿チェック、初校、再校、３校、念校をそれぞれ３人ずつで校閲している。それでも数件のミスを生じ、関係の方にはご迷惑をおかけした。

応募句は通常スタイルの、５０音順に配列、１人５句とした。現代俳句５賞の顕彰作品集は、第７６回現代俳句協会賞と第４１回現代俳句評論賞が該当作なしになったため、三賞（第２１回現代俳句大賞、第２２回現代俳句協会年度作品賞、第３９回兜太現代俳句新人賞）のみを最新のものとし、他に会員の新刊案内、出版部作成の出版物案内、協会運営部門の事業報告、全国各地区の事業報告、物故会員紹介を掲載している。

特に地区の活動報告では、事務的な報告記載もさることながら、各地区の句会作品を多く掲載して頂くよう各地区会長にお願いした。

さらに協会役員、顧問、名誉顧問、各委員会委員、各地区事務局一覧も掲載。結社（誌）の紹介を目的とした「俳誌のプロムナード」は、ここでもコロナの影響は僅かだが確実に出ており、今号では５３誌と前年より１誌減ったが、各結社の年鑑に対するご協力には感謝してやまない。

この後、印刷所より連絡があり、今回で降板することになり、やむを得ぬことながら、新しく見積もり合わせにより制作先を変更することになった。

◇『現代俳句年鑑　2023』の発行

本年度から印刷所が新しくコールサック社に変更。また経費節減のため、協会運営部門の事業報告、全国各地区の事業報告を現代俳句協会のホームページへ移行することで減量し、合わせて原稿募集を『現代俳句』に備え付けのハガキ以外に、メールによる応募を可能にした。

◆今年度の編集スタッフは、現在、秋谷菊野、石口りんご、川崎果連、川名

つぎお、田口　武、羽村美和子、町野敦子、本杉康寿、森須　蘭、山田ひかる、山本敏倖、我妻民雄。新メンバーに西本明未が加わり、計１３名である。

青年部

部長　黒岩徳将

昨年度までの取り組みの総括・今年度以降の計画や抱負、問題点

〈基本活動〉

・年４～５回の勉強会開催。
・定例句会「ゼロ句会」（49 歳以下）「イチ句会」（青年部限定）実施
・「現代俳句」の「翌檜篇」にて全国の会員の作品・文章を掲載。

〈昨年度の取り組み実績〉

① 定常活動である「ゼロ句会」「年４、５回の勉強会」を、オンライン開催として継続した。
② 非定常活動として、全国的な高校・大学の休校措置などに伴い、俳句に懸ける全国の高校生・大学生を支援するという目的の元、「センバツ！全国高等学校即吟俳句選手権」を開催した。
③ ネットでの投句・選句で完結する「イチ句会」を青年部内で月例実施した。
④ 青年部若手メンバー対象の俳句ゼミを隔月ペースで開催。「自然の真と文芸上の真」「第二芸術論」などの俳論を輪読した。
⑤ 気軽にお喋りができる SNS「Twitter」の「スペース」機能を利用。コアメンバーである青年部委員が対談を実施した。

第１回「ゲームと俳句」高村七子・黒岩徳将
第２回「中村苑子・芝不器男の俳句を語る」加藤右馬・川嶋ぱんだ

〈達成度合いの振り返り〉

① 「センバツ！」Youtube の視聴回数は２２００回を超えた。
② 黒田杏子に聞く『証言・昭和の俳句』と平成令和の俳句」は Youtube で無料公開。再生回数は３６００回となった。

〈今年度以降の目標〉

① 俳句を作り、読み合うことに関する様々な問題意識を広く共有し、現青年部員の発表の場を作り、青年部世代新規入会者増加を目指す。
② 多様な人に依頼を行い、青年部内外で活発な意見交換ができる場を作る。

〈勉強会開催テーマ・出演者〉

第１６８・１６９回「２０２１句集読書リレー」
『すみれそよぐ/神野紗希』発表：中西亮太（聞き手：正山小種）
『エレメンツ/鴇田智哉』発表：高村七子（聞き手：赤野四羽）
『符籙/橋本直』発表：川嶋ぱんだ（聞き手：黒岩徳将）

第１７０回「季語の『斡旋』は本当に言語化できないのか？」
山口昭男・福地敦・黒岩徳将
第１７１回「戦争を生きた俳人たち」
樫本由貴・吉沢美香・加藤右馬・加藤絵里子
第１７２回「黒田杏子に聞く『証言・昭和の俳句』と平成令和の俳句」
家藤正人・関悦史・黒岩徳将

〈今後の展望〉

会員・非会員に関わらず「今、俳句で何に関心があるか？」をヒアリングし、現在的および普遍的なテーマを議論していきたい。紹介による入会およびオンライン句会参加者が微減しているため、レギュラー参加者で声を掛け合うことで対策したい。

研修部

部長　なつはづき

研修部の事業内容は大きく分けて３つあり、令和３年から４年にかけてはこの３つの事業それぞれの改革を行った。

研修通信俳句会（協会員対象。年６回通信にて行う俳句会。講師２名）

コロナ禍で令和２年、３年の特別研修会（年１度、東京に集まっての吟行会）は中止となった。これを機に研修会の在り方を見直し、紙面での俳句大会に切り替える事とした。対面での句会は参加者の高齢化などで年々参加者が減少していたので、その点を考慮したものである。紙面での大会は、参加者の互選の他、研修部員、研修部長に加え、特別選者に現講師の堀之内長一氏、成田一子氏、令和４年度の講師である羽村美和子氏、鈴木牛後氏、そして中村会長、小林副会長、筑紫副会長にもご協力いただき、滞りなく行われた。今後の励みにもなる実り多き大会となった。

俳句通信添削教室（協会内外から広く募集）

以前は添削担当者が研修部長一人であったのを、複数人で受け持つことし、より多くの添削を、よりスピーディーに対応できるようにした。添削料の支払いも選択肢を増やし（郵便振込とペイパルに対応）、１回払いだけでなく、６回払いの設定を作り割引を行う事によって、利用者の利便性を図った。添削講師は杉浦圭祐氏、瀬戸優理子氏、堀田季何氏、松本勇二氏、研修部長のなつはづきで担当している。

俳句教室（月１回、年間１０回）

長年続いてきた教室を一新し、月曜教室（秋尾敏氏）、水曜教室（こしのゆみこ氏）、金曜教室（大井恒行氏）を開講し、新規参加者を募った。会場が東京であり、近郊の人しか通えない点を改善し、新たな試みとして Zoom を活用したインターネット教室（堀田季何氏）を新設した。これにより今まで遠方で教室に通えなかった方も、俳句教室に参加出来るようにした。

ＩＴ部

部長　堀田季何

ＩＴ部は、部の枠組みを超えた一種のインフラとして、他部と協力したり、他部を支援したりすることも交えながら、協会全体のデジタル化及びＤＸを推進している。

この１年間における最大の達成は、会員誌『現代俳句』電子版の提供開始である。株式会社ソニー・ミュージックエンタテイメントとの提携により、同社の電子書籍オンラインストア「Reader Store」において、『現代俳句』電子版が４月号より提供され、協会員は紙版に毎号掲載のクーポンを使うことで、無料で電子版を閲覧できることになった。

また、今年から、『現代俳句年鑑２０２３』にオンラインで参加、投句できるようになった。簡便な投句システムを外部技術者と構築したおかげであるが、少しカスタマイズすれば、年鑑以外にも転用できる見込みである。

その他は、ほぼ定常的な実施である。ホームページ上のオンライン書店「妻恋坂書房」での協会出版物や協会員の書籍の販売、ＩＴ部開催の二種類のインターネット句会（協会員の句会はＩＴ部長による総評付）、青年部及び地区協開催のインターネット句会へのシステム貸出、地区協会長インタビューシリーズの公開、協会ホームページに昨年設置したショッピングカート・システム及び連携した決済システムによる各種支払い対応、ホームページ自体の更新、他部のＩＴコンサルティングや補佐、事務局のＩＴ保守管理等。

事務局

事務局長　水野二三夫

◇令和４年度理事会・通常総会

令和４年度現代俳句協会理事会・総会は、３月２６日（土）上野東天紅にて開催を予定していたが、一昨年来の新型コロナウイルスの感染拡大の継続という状況に鑑み、業務運営委員会（会長、各副会長及び幹事長が定例メンバー）の決定により、３年続けての開催を取り止めとなった。代わって、協会執行部からは、既に確定していた理事会及び総会に諮るべき各議案に関し、３月１１日付にて理事各位に書面にて賛否を問う文書を発信した。その結果、理事総数５９名全員より回答があり、次の通り全ての議案について賛同が得られたので、総会に付議すべき議案として、協会規約第３４条の③及び④に定める理事会決議要件を満たしたものとし、理事会の書面決議書を作成した。また、令和４年度通常総会に関しては、会員からの委任状を１，８１２通受けており、協会規約第３１条に定める総会決議定足数である前期末会員数の１/４、すなわち１，１１３通を超えていることから、執行部提案の全ての議案に関して、総会開催に代えての議決が委任されたものとし、総会の書面決

議書を作成した。なお、３月２６日にオンライン会議可能な理事の方々を対象とした議案説明会を開催、１７名の理事が参加した。
【議案の内容】
第１号議案 令和３年度事業報告
　賛成５８　反対無し　委任１
前年度に引続いて、財政の健全化と会員増強及び外部への発信力強化を謳った年度目標のもと協会事業に注力。コロナ禍の中、最大限にオンライン化・リモートベースでの事業形態を追求し、コストの節約と共に、現俳協の存在を内外にアピールした。年度末会員数は、４，４５５名。
第２号議案 令和３年度会計報告
　賛成５８　反対無し　委任１
単年度収支は４，３４３千円の黒字となり、４百万円を運営基金に積み立てた。
第３号議案　令和４年度事業計画
　賛成５８　反対無し　委任１
前年度に引続いて会員増強に注力。新規事業及び「現代俳句オープンカレッジ」の充実を図り、協会のプレゼンスを高める。
第４号議案　令和４年度予算案
　賛成５８　反対無し　委任１
単年度収支は会員数減により５，１９０千円の赤字見込み。この圧縮と採算性重視の事業執行により、黒字化をめざす。
第５号議案　協会の今後の運営（一般社団法人への移行）について
　賛成５８　反対無し　委任１
協会の今後の発展を期する為に、任意団体としての現況から一歩踏み出し、協会組織全体を法人化して、社会的信用を増大させ、時代のニーズにマッチした形で、会員の受益を最大化することを目指す。法人の形態としては、非営利型の一般社団法人。一部に収益事業も行う。新法人の名称は、「一般社団法人現代俳句協会」（予定）。今後、法律・会計面も含めた新法人の制度設計の検討に入り、機関決定を経て新法人を設立・登記の後、現在の協会の解散決議を以て、その全ての権利、義務、残余財産を新法人が継承する形を目指す。
新法人の実質的な業務開始は、令和５年４月に見込む。

◇第２２回現代俳句大賞は川名　大（かわな　はじめ）氏

令和４年２月１６日　現代俳句大賞の選考委員会が開かれ、川名　大氏が受賞者として決定された。
（授賞理由は次の通り）
・長年にわたり、近現代俳句の研究に尽力、ことに新興俳句の研究に於ける第一人者である。
・富澤赤黄男・渡邊白泉・西東三鬼らの推進した新興俳句を主たる研究対象としつつ、近現代俳句の軌跡を俳句表現史という視点から構築した。
・文献資料の精緻な分析、検証にもとづき、昭和俳句史の壮大な地平を多くの著書に著した。

◇会員の概況について

令和３年度末会員数は次の通り。

期首会員数　４，６８３名、入会者　１７５名、退会・死亡者４０３名
期末会員数　４，４５５名
（対前年度末比　２２８名減）

◇主な物故者

前回の年鑑に記載以降、名誉会員では、長峰竹芳氏（俳誌「好日」前主宰）が逝去された。顧問は該当者なし。

◇第58回俳句全国大会

令和３年１０月３０日（土）東京の東天紅上野店・「鳳凰の間」にて開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大に鑑みて当日の開催を断念、応募句の審査・顕彰を行ない、作品集を各投句者にお送りするのみの形とした。応募句は１２，０６９句であった。

全国大会賞受賞作品

方舟はこんなかたちと置くマスク　多田せり奈
死んでから蛇重くなる棒の先　杉原　青二

毎日新聞社賞受賞作品

にんげんをあるいていればしぐれけり　朴　美代子

朝日新聞社賞受賞作品

八月の修正液は火の匂い　山本　敏倖

産経新聞社賞受賞作品

水かけて出水の水を押し流す　尾堤　輝義

東京新聞賞受賞作品

太陽が捨てられてゐる夏休　三玉　一郎

読売新聞社賞受賞作品

風花を小舟のように母が来る　清水　茉紀

俳句のまちあらかわ賞受賞作品

蟬時雨わたくしたちは時間です　油津　雨休

また特別選者賞２８句、秀逸賞３０句、佳作５０句がそれぞれ表彰された。⑨ 全国俳句大会の記念講演は、前回の第５７回大会で予定されて中止・繰延べとなっていた画家の斎藤吾朗先生による「モナリザからのおくりもの」と題した講演が行われる予定であったが、残念ながら取り止めとなった。

◇協会五賞の表彰式

例年は協会各賞の表彰式を、通常総会及び全国俳句大会の場で執り行っていたが、共に開催出来なくなった為、東京・東天紅上野店にて別途実施することとなり、各賞の受賞者及び協会から特別顧問を含む会長以下関係役員が出席した。

日時・場所
令和３年１０月３０日（土）
東天紅上野店・「飛鳥の間」
被表彰者

第２１回現代俳句大賞　池田　澄子
第２２回現代俳句協会年度作品賞　中村　　遥
第２２回現代俳句協会年度作品賞　星野　早苗

第３９回兜太現代俳句新人賞）　　小田島　渚
（注）第７６回現代俳句協会賞及び第４１回現代俳句評論賞は、該当者なし。

◇永年在籍会員について

令和３年度に表彰された永年在籍会員は、入会５０年が８名、同４０年が３５名、同３０年が５９名の計１０２名。これらの方々には感謝状と記念品をお送りした。

◇「全句集」の収蔵について

過年度収受分を含め、協会が寄贈を受け保管している全句集が令和４年６月末で、著者１４４名、冊数で１５８冊となった。